View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Saitama University Cyber Repository of Academ

埼玉大学　国際交流センター紀要
第６号　抜刷（2012 年３月）

〔論　考〕

Otega による二人称（代）名詞の考察について

金　井　勇　人

Ortegaによる二人称(代)名詞の考察について

About the Idea of Second Person Pronoun by Ortega

金井 勇人 [i]

KANAI Hayato

（要旨）

二人称名詞（例えば「あなた」等）は，聞き手を指すための語である。しかし，そうでありながらこの二人称名詞の使用は非丁寧さを帯びる。それは一体なぜなのだろうか。そこで本稿においてはJosé Ortega y Gasset（スペイン，哲学者，1883-1955）による二人称代名詞の考察を端緒にしてこの問題について考えてみたい。

キーワード：二人称(代)名詞，直示，境遇性，「人間性」の弾丸，人称(代)名詞が持つ恐ろしさ

１．はじめに

二人称指示とは聞き手を指すことである。聞き手は，話し手によって“deictic”（直示的に）指されることになる。この“deictic”な指示のことを“deixis”（直示）という。deixis＝直示は，次のように定義される。

(1) The single most obvious way in which the relationship between language and context is reflected in the structures of languages themselves, is through the phenomenon of diexis. The term is borrowed from Greek word for pointing or indicating, and has as prototypical of focal exemplars the use of demonstratives, first and second person pronouns, tense, specific time and place adverbs like *now* and *here*, and a variety of other grammatical features tied directly to the circumstances of utterance. (Levinson1983:54)

(2)「談話に先立って，言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し，言語的文脈に取り込むこと」（金水1999:68）

つまり，deictic＝直示的な表現とは，発話の「場」に存在する「実在物」を言語で指し示すことである（そのことによって，言語的文脈に取り込む）。Levinson(1983)は，そのような“deictic＝直示的”な表現として，人称，時制，場所などを，代表的なものとして挙げている。

[i] 埼玉大学国際交流センター助教

(3) … suppose we find a bottle in the sea, and inside it a message which reads:

<< Meet me here a week from now with a stick about this big. >>

We do not know who to meet, where or when to meet him or her, or how big a stick to bring.

(Levinson1983:55)

上の例は，言語表現における“diexis＝直示”の重要な役割を如実に物語っている。話し手（＝messageの書き手）は，“Meet me here a week from now with a stick about this big”と発することによって，me，here，now，thisの指示対象を言語的文脈に取り込んでいる。

しかし，(3)の例が面白いのは，話し手（＝messageの書き手）にとっては，その指示対象を言語的文脈に取り込めるが，一方，その直示行為の「場」に居合わせなかった聞き手（＝messageの読み手）にとっては，それを解読できない，ということにある。

このことから“diexis＝直示”という概念が発話の「場」と密接な関係を持っていることが理解できる。本稿で取り上げるのは，二人称名詞「あなた」等による二人称指示であるが，これらも“deixis＝直示”による指示方法をとっていることを，まずは概観した。[ii]

２．考察

二人称名詞の特徴の１つとして，「境遇性」を持つことが挙げられる。「境遇性」について，田窪(1997)は，以下のような例を挙げて説明している。

(4) 甲：私も馬鹿でした。
　　乙：そうです。私も馬鹿でした。

(5) 甲：あなたが間違っている。
　　乙：いや，あなたが間違っている。（田窪1997:14，下線は引用者による）

このとき，(4)においては，甲の発する「私」は「甲」を，乙の発する「私」は「乙」を指す。また，(5)においては，甲の発する「あなた」は「乙」を，乙の発する「あなた」は「甲」を指している。

このように，同じ指示語であっても指示者の立場を反映して指示対象が異なるというような性質を，田窪(1997)は「境遇性」と呼んでいる。本稿でも，それに従う。[iii]　先に述べたように，二人称名詞の特徴は，この「境遇性」を持つことである。

「境遇性」を持つということは，「あなた」「きみ」「おまえ」等の二人称名詞が，あらかじめ指示内容

[ii] 田窪(1997)は「人称代名詞」と「人称名詞」の違いについて，次のように述べている。

人称代名詞という範疇は基本的に性数格の一致のある言語において，その一致特性のみを担う範疇である。したがって，名詞と区別された統語範疇としての代名詞は閉じた語類で，原則的に語彙的出入りはない。これに対して，「あなた，わたし」等，日本語の人称をあらわす語類は，必要があれば外来語からでも流入できる。例えば，「ユー」，「ミー」を話し手，聞き手を指すために使うこともできる。これらは開かれた語類であり，他の名詞類と区別する文法的理由はない。そこでこれらの語類を人称名詞と呼ぶことにする。(田窪1997:14)。

本稿の筆者も，この考え方に同意するものである。したがって本稿においても「二人称代名詞」ではなく「二人称名詞」という術語を使用している。

[iii]「境遇性」という術語は，三上(1955)に由来する。ただし三上(1955)は「境遇性」を広義に使用しているのに対して，田窪(1997)は人称詞に限って狭義に使用している。

を持たない，ということを意味する。指示内容は，その指示の現場において初めて決まる。まさにこのことが，二人称名詞の使用が非丁寧さを帯びる理由の１つである，と考えられる。

(6) 冴子はある夜，隣の床の中で，くるりと鮎太の方へ顔を向けて言った。
…（中略）…
「あなたは私の事を冴ちゃんと言うわね。お姉さまと呼びなさい」
「お姉さんってか」
「お姉さんじゃないの，お姉さま」（あすなろ物語）

(7)「クサキくん！ すべてきみの責任だよ。きみが手をこまねいてブンとかいうやつをほうっておくから，つけあがってこんなことまでやってしまうんだ。いいかね，クサキくん，三日間の猶予をやる。三日のうちにブンを逮捕しろ！ できなきゃ，きみはくびだぞ！」（ブンとフン）

(8) 加藤さん自身も「おれが大将なら，おまえは２等兵だ」と妻に言ったことがある。仕事の厳しさ，思い入れを，冗談めかして言ったつもりだが，今では間違っても言えないせりふだ。
（毎日新聞1999.04.24朝刊）

(6)の「あなた」，(7)の「きみ」，(8)の「おまえ」は，指示の現場で発話されるまで，「内容」を持っていない。指示の現場において発話されることによって初めて，「鮎太」「クサキ」「妻」という「内容」を獲得することができるわけである。

これら(6)(7)(8)における二人称名詞による指示行為は，一見何の変哲もない指示行為である。しかし，人を指示するということは，その人を“直示”することによって話し手の言語的文脈に“勝手に”引きずり込む，という行為でもある。そのような行為が，本質的に“暴力的な”性質を持つ行為である，ということは想像に難くないであろう。

とは言え，(6)(7)(8)においては，話し手（指示者）と聞き手（被指示者）との間に，特に心理的な葛藤がもたらされたりはしていない。しかしそれは，これらの場面において，「あなた」「きみ」「おまえ」と話し手が発し，それを聞き手が受容することが“通常”である，という前提があるからである。

平たく言えば，(6)(7)(8)における話し手と聞き手とは，［親疎］関係で言えば，いずれも［親］の関係にある。あるいは，［上下］関係で言えば，話し手が上位者で，聞き手（被指示者）が下位者となっている（あるいは両者の関係が対等）。

そのような間柄では，聞き手（被指示者）は，どのような二人称名詞によって“直示”されようと，それを受容するだろう。逆に言えば，そのような二人称名詞によって直示されることが，それまでの二者関係において“通常のこと”となっているわけである。

しかし［親］の関係にない二者において，あるいは話し手が下位者，聞き手が上位者である二者においては，話し手から聞き手に二人称名詞が発されるとき，その“直示”という行為が本質的に持っている“暴力的な側面”が，明るみに出てくる。

その“暴力的な側面”というのは，いわゆる“非丁寧さ”として言語上に現れてくる。以下のやり取りは二人称名詞による“直示”が非丁寧となる，非常に分かりやすい例と言える。

(9) それはあきらかに影村の訊問であった。加藤を或る種の容疑のもとに取調べようとしている刑事の態度にも見えた。加藤は自分の顔のほてっていくのを感じていた。いかりが顔に出て来たのである。
「いったい，あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです」

「あなただと？」

影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。（孤高の人）

「影村」は教師，「加藤」は生徒である。「加藤」が発した二人称名詞「あなた」は，この指示の現場で発されたことにより，初めて「影村」という指示内容を獲得できる。

注目すべきは，「影村」が「あなた」と指示されたことを不愉快に思った，ということである。このように，二人称名詞による二人称指示は，聞き手への非丁寧さを帯び得る。

日本語の代表的な二人称名詞を，仮に「あなた」「きみ」「おまえ」の３つと捉えると，「あなた＞きみ＞おまえ」の順に丁寧さが下がっていく。(9)で留意すべき点は，話し手の「加藤」が最も丁寧な二人称名詞「あなた」を用いているにもかかわらず，聞き手の「影村」を怒らせてしまった，ということである。

つまり，日本語においては，［疎］の関係にある「上位者」の聞き手を指すためには，適切な二人称名詞が存在しない，ということを含意し得る。[iv]

それでは，なぜこのような事態になっているのだろうか。

このことは，上述したように，二人称名詞による指示が［境遇性］を持つ直示であることと関係がある。つまり，聞き手（被指示者）は，“直示”されることによって，“勝手に”話し手の言語的文脈に取り入れられてしまう。まさにそのことが，直示の“暴力的な側面”なのであって，言語的な非丁寧さの原因となるのだと考えられる。

このことを目に見える形で証明するのは難しいが，以下に引用するOrtega(1957)を端緒に考えてみたい。Ortega(1957)は，人称(代)名詞による指示の非丁寧さについて，以下のように述べている。

(10) …もしとつぜんだれかが劇場の中で「私だ！」と叫んだとしたら，…どういうことが起こるであろうか。さしあたっては，すべての人が反射的に部屋の一点に，すなわちその叫び声が発せられた一点に，顔を向けるであろう。…「私です！」というあの叫び声が発せられた場所に顔を向けるときに，われわれがするのは，その実在を取り込み，それを引き受けることにほかならない。…彼が私というのを聞くときに，彼の自叙伝全体がわれわれに向かって発射され，提示され，公開される。もちろんそれと同様に，われわれがだれかにあなたと言うとき，われわれは，その人についていままで形づくってきたところの伝記［生活記録］を，彼に向けて至近距離から発射するわけである。

[iv] 例えば「貴様」という二人称名詞は，語構成的には「貴」「様」であって，極めて丁寧な意を表せそうである。実際，

中世末から近世初期頃にかけて発生した当初は，もっぱら武家の書簡でかなりの敬意をもって用いられた。しかし，その後口頭語化して，一般庶民にも用いられるようになるに従って次第に敬意を失い，明和・安永期（1764～81）には，軽い敬意を保ったにすぎず，文化・文政期（1804～30）には完全に対等の者に対する語となった。天保期（1830～44）に至ると，もっぱら目下の者に対して用いられるようになり，ののしりことばへと下落した。このように時代が下るに従って使用者層も下降の一途をたどり，近世末には上流社会では用いられなくなり，ぞんざいな語，もしくは目下に対する卑称の代名詞として用いられ現代に至っている。（日本国語大辞典 第二版 第四巻）

という。このように，もともと敬意を含んでいた表現が，長期に渡って使用を重ねるうちに敬意を失っていくことを「敬意逓減の法則」というが，ここで注目したいのは「貴様」のような語構成的には極めて丁寧な要素から構成される語であっても，敬意は逓減していく，ということである。

もっとも「敬意逓減の法則」自体は，人称名詞のみに見られる現象ではない。しかし日本語の人称名詞の「敬意逓減」は特に著しいと思われる。例えば「あなた」という人称名詞も，今，本稿で論じているようにすでに上位者を指すことが（丁寧さの観点から）難しくなっている。

これが好ムト好マザルトニカカワラズ「人間性」の二つの弾丸，すなわち二つの人称代名詞が持つ恐ろしさである。…われわれの個性が隣人の上にあまりに重くのしかかったり，彼を圧迫したり，侵食したりする…。

(Ortega著，A.Mataix・佐々木孝訳『個人と社会－人と人びと－』pp.207-208) [v]

本稿では，上記のように指示者が被指示者に向かって「あなた」と言うとき，それは単に指示対象を特定することのみにとどまらず，指示者の「個性」（ここでは，指示者が被指示者をどのように捉えているか，と読み替えることができる）が，被指示者「の上にあまりに重くのしかかったり，彼を圧迫したり，浸食したりする」から，と考える。

つまり，直示によって対象を言語的文脈に取り込む，ということは，暗に，上記のようなプロセスを辿らなければならない，ということを意味する。

上記に加えて，“日本語の”二人称名詞が非丁寧である理由というものも，考えられるだろう。日本語では，構文的に主語の省略が可能である。

(11) いったい，あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです。

(11)’ いったい，（φ）なぜ私にそんなことを訊ねるんです。

(12) Why on earth do you ask me such a thing?

(12)’＊ Why on earth do（φ）ask me such a thing?

日本語では(11)’のように「あなた」が省略できる。日本語の場合，いわゆる“主語”は，言語的に表出されなくても構わない（非文とならない）からである。このことは，逆に言えば，主語の“席”が構文的に保証されていない，と言うこともできる。

したがって，聞き手が誰であるのか分かり切っている，(11)のような場面において，わざわざ「あなた」と言うことは，余剰以外の何物でもない。この余剰性こそが“日本語の”二人称名詞の使用をさらに非丁寧にするのだと考えられる。

一方，英語では，(12)’のように“you”を省略すると非文になってしまう。英語の場合は，主語が言語的に表出されなくてはならないからである。このことは，主語の“席”が構文的に保証されている，ということを意味する（このことが「人称代名詞」という名称の所以でもある)。したがって英語の場合には，日本語のような余剰性による非丁寧さの問題は発生しない。[vi]

ここで(6)(7)(8)に再び注目すると，これらの「あなた」「きみ」「おまえ」の使用も，表立って現れないものの，それぞれ非丁寧さを帯びている，ということが分かる。

---

[v] Ortega(1957)は，日本語についても言及している。興味深いので，以下に引用する。

…それゆえ日本語では，それら二つのピストルの弾丸［二つの人称代名詞］――少しばかり，いやときにはたいへんずうずうしい――をついに抹殺するにいたったことは驚くにあたらない。すなわちそれは，好むと好まざるとにかかわらず，私の個性を隣人に注入し，そして隣人についての私の見解をその隣人に注入するところの私とあなたという言葉である。そこではこれら二つの人称代名詞は華麗な儀式的形式にとって代わられた。つまりあなたと言う代わりに「そちら様」というようなことがいわれ，また私と言う代わりに「拙者」などと言われるのである。

(Ortega 著，A.Mataix・佐々木孝訳『個人と社会－人と人びと－』p.209)

[vi] ただし，英語においても，国王や女王に対する“His/Her Majesty”という呼称がある。これは“you”という二人称代名詞の非丁寧さを回避しているものと考えられる。

(6)「あなたは私の事を冴ちゃんと言うわね。お姉さまと呼びなさい」
(7)「クサキくん！ すべてきみの責任だよ。…」
(8)「おれが大将なら，おまえは２等兵だ」

ただしそれは先述したように，上位者から下位者への指示行為であったり，親しい相手に対する指示行為であったりするため，そのような非丁寧さが顕在化しないだけである。

(9)「いったい，あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです」

一方，(9)のような，明らかな下位者から上位者への指示行為のとき，かつ親しくない聞き手に対する指示行為のときには，その非丁寧さが顕在化してしまう。

それでは，非常にくだけた場面において，上位者から下位者に対して，かつ，その聞き手が非常に親しい場合には，どうなるだろうか。この場合には，予想通り，二人称名詞を使った指示も，非丁寧とは感じられない。

(13)「おっかさん，ノリおくれよ。」
「なんに使うの。」
「おれも，それ，手つだうよ。」
「吾一ちゃん，きのうも言ったでしょう。おまえはこんなことをするもんじゃありませんよ。」
「だって，おっかさん，今，いねむりしてたぜ。」（路傍の石）

上位者である「おっかさん」が，下位者である息子「吾一」を，二人称名詞「おまえ」によって指示している。しかし「吾一」は，(9)において「影村」が「加藤」に抱いたような不愉快さを感じていない。

むしろ，「吾一」は「おっかさん」による「おまえ」という指示を“快く”感じているようですらある。すなわち「吾一」は，「おっかさん」による「おまえ」という指示行為を“受容”しているわけである。

先に述べたように，二人称名詞は「あなた＞きみ＞おまえ」の順に，丁寧さが下がっていく。それでは，丁寧な二人称名詞を用いれば，問題は生じないのか，というと，決してそうではない。例えば，(13)に続く場面において，

(13)’「やっぱり，吾一ちゃんには無理だったのよ。」
「ううん，そんなことないよ。おれにできるよ。――大丈夫だよ。」
「もうたくさん。あなたにやってもらうと，かえって手まがかかるから，これだけにしておいてちょうだい。」

のように「あなた」を用いた場合，それは突き放した言い方のように感じられる。これは，いわゆる“慇懃無礼”という行為に近いものと思われる。

それは，日常的に「おまえ」を用いて指す聞き手に対して，急に「あなた」を用いたギャップによるものである。仮に日常的に「あなた」を用いているのだとすれば，逆に(13)は非丁寧であり，(13)’が“無標”ということになる。

どのような二人称名詞が“無標”であるのかは，それぞれの人間関係によっても違うであろうし，それは

すでに言語の問題から逸れてしまっているので，それを探求することは本稿の目的ではない。

ここで話を(13)に戻すと，先に見たように，人称名詞による指示は，基本的に非丁寧さを伴う。ただし，(13)のような人間関係においては，その非丁寧さが受容されているものと考えられる。一般に“親愛の情”と呼ばれるものは，こうした“非丁寧さの受容”から生まれるのであろう。

３．おわりに

本稿では，なぜ二人称名詞による二人称指示が非丁寧さを帯びるのかという問題について，Ortegaの考察を端緒に論じた。その結果，Ortegaが提唱した「人間性の弾丸」という比喩の適切性を「境遇性」「直示」といった言語学の術語を介して確認し得た。このことは「二人称(代)名詞の恐ろしさ」を根源的に説明するものであり，本稿では日本語の二人称名詞「あなた」「きみ」「おまえ」を例に，それらが伴う非丁寧さについて，具体的な考察を展開した。

参考文献

金井勇人(2003)「失礼さという観点から見た二人称指示の体系」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』48, pp.83-91，早稲田大学大学院文学研究科

金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4, pp.67-91, 言語処理学会

田窪行則(1997)「日本語の人称表現」『視点と言語行動』pp.13-44，くろしお出版

日本国語大辞典 第二版 編集委員会(2001)『日本国語大辞典 第二版（第四巻)』小学館

三上章(1955)『現代語法新説』刀江書院

Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press.

Ortega y Gasset, José (1957) *El hombre y la gente*, Alianza.
(Mataix, Anselmo・佐々木孝訳 (1989))『個人と社会－人と人びと－』白水社

引用資料

井上ひさし『ブンとフン』新潮文庫（初出 1970）

井上　靖『あすなろ物語』新潮文庫（初出 1953）

新田次郎『孤高の人』新潮文庫　（初出 1969）

山本有三『路傍の石』新潮文庫（初出1937～1940，未完）

毎日新聞（1999年版CD-ROM）（日外アソシエーツ）